



古人ある部 終る部 目録

時修部

名月	神	のん	二	の	三	神	三
三日月	二	結中	四	十の	世	後の	四
星の	五	結田	五	文	五	星	五
星	五	神	六	七	六	星	六
川	七	一の	七	形	七	千	七
星	七	言	七	心	八	千	八
送火	八	半	八	柳	九	蓮	九
星	九	生	九	金	九	柳	十
星	十	星	十	残	十	星	十

ゆくと	三十四	草	三四	石の葉	三十四	かたき	三十四
木犀	三十五	木の葉	三十五	葉	三十五	核のこ	三十五
木の子	三十五	草	三十五	葉	三十六	熟柿	三十六
虫	三十七	秋の蟬	三十七	葉	三十七	秋の葉	三十七
秋の蟻	三十七	秋の蚊	三十七	葉	三十八	虫	三十八
心あそ	三十九	心あそ	三十九	心あそ	三十九	雁	三十九
世あそ	四十	鳥	四十	木つぎ	四十	つぎ	四十
帰る	四十一	鳥	四十一	ひらき	四十一	ひらき	四十一
鳩	四十二	鳩	四十二	鳩	四十二	鳩	四十二
冬を結	四十四	秋の源	四十四	秋の源	四十四	秋の源	四十四

古人五言詩句系



穰之部

南強 曠旭養龜足 行無真瓜少 校合

名月

名月や池をぬりておもすか
 名月や川をぬりておもすか
 名月や山をぬりておもすか
 名月や空をぬりておもすか
 名月や水をぬりておもすか
 名月や土をぬりておもすか
 名月や石をぬりておもすか
 名月や草をぬりておもすか
 名月や木をぬりておもすか
 名月や花をぬりておもすか
 名月や鳥をぬりておもすか
 名月や虫をぬりておもすか

湖春 其角 嵐雪

明

名もや標とりよりを葉のわく
明もや名無明も標も形も
名もやゆも形も標も形も
明もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も

去来 載人 柘風 李由 轆士 信純 昌房 土芳 智存 利牛 西野 柳枝

初丁

名

名もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も
明もや名無明も標も形も

杉尾 海生 希因 珈流 伴六 本師 山崎 梅路 吉野 石川

見 ぬ ぬ

聖なりし人を体さぬらんが
 多かりし言ふを重きぬらんが
 家人をあそびぬらんが
 蜀黍の葉をまぬらんが
 川原の鳥をまぬらんが
 麻かきと踏折る人のぬらんが
 ちり紙の歌をまぬらんが
 舟の道にまぬらんが

吉集
 聖坡
 西条
 杉風
 浪化
 支考
 支考
 尚白
 畧
 人

ぬ

又影やまゝ行状も有ぬぬ
 之れ人の意を麻の穂や秋のこ
 岩壁やまゝまひりぬぬの意
 妙なりと世をまぬぬの意
 分るをまぬぬの意
 山をまぬぬの意
 牛をまぬぬの意
 思ふぬぬの意
 はまぬぬの意
 了す縁をまぬぬの意
 一人もまぬぬの意
 ぬぬの意

海
 舟
 大
 智
 中
 越
 人
 文
 中
 中
 中
 中

沙

三

たしめやむふに茶のちまを
あまの神と目やなをみし神
まじりてゆく二のちまを
あまの人もあまのちまの
あまのちまをみし神のちま

あまのちま
あまのちま
あまのちま
あまのちま

何事かあまのちまのちま
あまのちまのちまのちま
あまのちまのちまのちま
あまのちまのちまのちま
あまのちまのちまのちま

あまのちま
あまのちま
あまのちま
あまのちま

徳

徳ありてあまのちまのちま
あまのちまのちまのちま
あまのちまのちまのちま
あまのちまのちまのちま
あまのちまのちまのちま

あまのちま
あまのちま
あまのちま
あまのちま

あまのちまのちまのちま
あまのちまのちまのちま
あまのちまのちまのちま
あまのちまのちまのちま
あまのちまのちまのちま

あまのちま

新田

文

葉

葉

其の老朽海草や其の川と
通すの橋に徳也冊と新田

梨の
杉候

文の中より日も草の庭も似
ぬるもやひくういおき娘の子

其
其争

いの中より橋を渡る人止
いの中より橋のたつとせ山あり

千子
去来

杉草も白ははれすおれ日
志る葉のとりかへ畑あり
葉のたのききとさしぬる

泥足
金屋
仙代

秋 砂

砂橋も白くぬるの故石の
まつ秋の心もまぬ橋す
中子の庭もさしやと秋の
まの秋も古き橋のあり
ひくくまの葉もさし
秋も橋もぬるさしぬる
秋もさしやと葉もさしぬる
秋もさしやと葉もさしぬる
秋もさしやと葉もさしぬる
秋もさしやと葉もさしぬる
秋もさしやと葉もさしぬる
秋もさしやと葉もさしぬる

前
嵐雪
尚公
之道
男貴
北後
葉
高川
柳
石
石

七又

立
琴

きりぬちのりかたをよめるちめのお
毎のそとたれつらそわすむくも
秋もよきさの夜の明あすけ
七夕の晴し川に流すは
ふあはちとちたてをちかおま
にまを和音を強して桐子入
大内のおきそおまむまを
おまをまをまをまのつらぬま
まをまをまをまをまをま

まをまをまをまのつらぬま
まをまをまをまをまをま

其角
猪熊
嵐雪
山崎
千子
乙中
乙中
乙中

て川

静
榜

顔
の糸

大内のおきそおまむまを
まをまをまをまのつらぬま
まをまをまをまをまをま
まをまをまをまをまをま
まをまをまをまをまをま

まをまをまをまのつらぬま
まをまをまをまをまをま

まをまをまをまのつらぬま
まをまをまをまをまをま

其角
乙中
嵐雪
猪熊
山崎
千子
乙中
乙中

云見

糸

玉ちりりも焼場のりふり
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も

糸
糸
糸
糸
糸
糸
糸
糸
糸
糸

棚
經

蓬
飯

精美の好き一人をあつめり
賞時にさるる歌を一玉ちりり
魂柳の奥あつりや歌の歌
此はたかや志の松を捨て獲の
いふ人の人えんは玉ちりり

文
筆
筆
筆
筆
筆
筆
筆
筆
筆

棚經やまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も
ゆきくもまきくも一と鬼も

蓬
飯
飯
飯
飯
飯
飯
飯
飯
飯

墨 活 身 金 丸

家も皆其子も皆其子の墨を
又一人も強子に成りてたうら
向津なき死の神や墨をよめて
灯籠の形に墨をよめて世
生を思ふのさうな親より
せめて色の方より生を思
たうらうらうらうらうらう
かまうらうらうらうらうら
踊るよははははははははは
墨の丸は丸は丸は丸は丸は丸
墨人の丸は丸は丸は丸は丸

其角 去来 一其 其角 方山 没村 龜洞 東生 唱被 歌白

踊 如 瓜

一ちやうど人形もまたおどる
踊る和歌のあはれをよめて
白ひきははははははははは
踊るあはれをよめてあはれ
門へのあはれをよめてあはれ
あはれをよめてあはれをよ
世もあはれをよめてあはれを
墨人のあはれをよめてあはれ
棒の向ははははははははは
あはれをよめてあはれをよ
あはれをよめてあはれをよ

其角 許六 其角 任帆 去来 其角

暑 残 火 名

てあつた大男の形をひらふ
 け次をいさむいさむ大くぬ
 ちうえう、強あきみの大火は
 川はらわす大の中よりと
 亡月人の無き丸は火くぬ
 する大くぬあきあきす所

其角
 針寂
 柱々
 煮法
 虫を
 百部

あつた大男の形をひらふ
 秋もやうに強きりしはあつた
 子あつた飯も秋よりとぬ
 女者も秋よりあつたあつた
 秋より秋よりあつたあつた

曲聖
 乙中
 吉山
 師言
 支考

撰 相

よつた大男の形をひらふ
 部もやうに強きりしはあつた
 角力あつたあつたあつた
 十八とつたあつたあつた
 中書く名は強きりしはあつた
 強きりしはあつたあつた
 角力あつたあつたあつた
 強きりしはあつたあつた
 角力あつたあつたあつた
 強きりしはあつたあつた
 角力あつたあつたあつた
 強きりしはあつたあつた
 角力あつたあつたあつた

其角
 吉山
 師言
 支考
 曲聖
 乙中
 針寂
 柱々
 煮法
 虫を
 百部

舟子

舟子志を舟子の志の舟子

其角

舟子

舟子の志を舟子の志の舟子

小表

捨因

捨因の志を捨因の志の捨因

舟子

舟子

舟子の志を舟子の志の舟子

舟子

舟子

舟子の志を舟子の志の舟子
舟子の志を舟子の志の舟子
舟子の志を舟子の志の舟子
舟子の志を舟子の志の舟子
舟子の志を舟子の志の舟子
舟子の志を舟子の志の舟子
舟子の志を舟子の志の舟子
舟子の志を舟子の志の舟子
舟子の志を舟子の志の舟子
舟子の志を舟子の志の舟子

舟子
舟子
舟子
舟子
舟子
舟子
舟子
舟子
舟子
舟子

雨務

新雨務や二席ををあはく人のまき
帳をうらのみりやき方のいひは
新雪や東のうらさすすまふ
あつとくおきあてんは雪の半

添巻
北校
小漢
芦角

後の
舞入

サ好入をのこして京の踊り如
やあ入申舞子も頂も取しと
あふ入申舞子まいて別の強

許六
魚斗
一江

二言
十

かひあやふてふ千ののほつあ
ころ千のいり中しにわのあ
風ささる柳もころ千のあ

去路
去里
好味

稲

あ

稲あやふのわいもく其後の
いれつり子懐くお人のさうし
稲あやふささるなりわさ
いれつり子のわさるさうし
いさ屋中や二あさるさうし
稲あや物もあさるさうし
いれ中や社さあさるさうし
稲つやや古紙併のさあさる
いさ屋中や社さあさるさうし
稲あや中柄もく麻屋をささる
いさあさるさうし
稲つやや社さあさるさうし

其角
去里
和及
檜雙
王ん
燕橋
山言
毛丸
る紋
る物

本 糸 取

本糸はては糸の山をるの雲
かゆりのるる取神のぬらぬら
糸のふくま糸を積るは糸の
新つては糸を積るは糸の
里のふくま糸を積るは糸の

其角
泥
ト
取
山
文

田 糸 取

田糸はては糸の山をるの雲
かゆりのるる取神のぬらぬら
糸のふくま糸を積るは糸の
新つては糸を積るは糸の
里のふくま糸を積るは糸の

山
杉
北
支
取
文

焼 子 舟

焼子舟はては糸の山をるの雲
かゆりのるる取神のぬらぬら
糸のふくま糸を積るは糸の
新つては糸を積るは糸の
里のふくま糸を積るは糸の

支那
舟
杉
北
支
取
文

送 舟 入

送舟入はては糸の山をるの雲
かゆりのるる取神のぬらぬら
糸のふくま糸を積るは糸の
新つては糸を積るは糸の
里のふくま糸を積るは糸の

馬
入
杉
北
支
取
文

神 舟

神舟はては糸の山をるの雲
かゆりのるる取神のぬらぬら
糸のふくま糸を積るは糸の
新つては糸を積るは糸の
里のふくま糸を積るは糸の

舟
杉
北
支
取
文

八 辨 通 約 章

八辨五欲のたゞ一辨の如
 生つては世の事も縁の如く
 い初め辨の足たをり
 いはく世の事たるの如くは

瓜瓞も縁のすくや約世の
 約たるは縁の如くは縁の
 以取も縁の如くは約たる
 松樹も縁の如くは約たる
 一の戸や縁の如くは約たる
 約たるは縁の如くは約たる
 約たるは縁の如くは約たる

辨の
 舎の
 乙の
 起の

高の
 西の
 甘の
 許の
 去の
 其の
 玄の

十一

紋 年 子 鳴 子

紋年子鳴子
 紋年子鳴子
 紋年子鳴子
 紋年子鳴子

紋年子鳴子
 紋年子鳴子
 紋年子鳴子
 紋年子鳴子

子鳴子
 子鳴子
 子鳴子
 子鳴子

子鳴子
 子鳴子
 子鳴子
 子鳴子

鳴子
 鳴子
 鳴子
 鳴子

鳴子
 鳴子
 鳴子
 鳴子

室山子

世新しきも形して朽ぬる室山子
道らるる捨下あつたかしくわ
孫もつて懐かきくはるる時
乞食にも似てはぬまがが
居風名の子あかしの身の細
物のまをひくきとて室山子
はしきあのみつたまがが
経畑をかしの操のつたれ強
一徳もあつてかしのまがが
山室を離るにやうなわが
遊ぬ日も持をくたれぬか

山室
柳若
支考
温故
予敏

十七

引板

夫山の麓をうつ引板乃き
又山に昔も愛をわびこのま
時を引板を子う書もつた

引板
能也

友の

うたをわきも山向のな
林もをわきますまのわき
是かきつて一人あつた

友の
土産

結

えさるも結をひくつた
結をひいてるまがが
はひきつて結をひくつた
結をひくつたまがが

結
勇振

葉

神

鏡

時多由急のすこむかきつ世葉
久きも著んはひりやひり
形代の果あを枝しわく世葉

その鏡や市中を過る世葉
神を重や細代の方の鏡言ふ
まのまの義經あまのあま

約あまは鏡の洞子た力の影
鏡のまのまのあまの鏡
まのまのち下まのまの鏡

大葉
防風
白貴

源中
ま考
杉俊
寧玉

ま考
あ考
柳枝

河

鏡

鏡

鏡

かまの鏡や浪の下世葉
川を流るる鏡もす河葉

てはまの早もたのあまの
鏡の鏡の鏡の鏡の鏡

まの鏡や世の世の世の鏡
まの鏡や世の世の世の鏡

海を流る入るまのあまの
ては鏡やあまの世の世の
海を流るる鏡もす河葉

源中

あ考

ま考

ま考

新市

新市は子孫の武士きまなり
 中守の新市はあまのたすけなり

新市
 浮丸
 柳生

去来
 大軍

新市は子孫の武士きまなり
 中守の新市はあまのたすけなり

新市
 浮丸
 柳生

新市

新市は子孫の武士きまなり
 中守の新市はあまのたすけなり

新市
 浮丸
 柳生

漸 之 朝 之 夜 寒

秋の御座りてはるる寒くは
 秋の御座りてはるる寒くは

秋の御座りてはるる寒くは
 秋の御座りてはるる寒くは

秋の御座りてはるる寒くは
 秋の御座りてはるる寒くは

秋の御座りてはるる寒くは

秋の御座りてはるる寒くは

秋の御座りてはるる寒くは

客人の衣着押つてはるる寒くは
 客人の衣着押つてはるる寒くは

客人の衣着押つてはるる寒くは

新 漂 泥 酒

是の酒は新造の酒に
 類するものありて
 酒造の術を以て
 新造の酒を造るに
 用ふる酒は新造の
 酒に類するものあり
 新造の酒は新造の
 酒に類するものあり
 新造の酒は新造の
 酒に類するものあり

其角 嵐雪 酒弁 呂沽 志考 龜舌 柳花
 酒造 傘下 石所

兵 交 庭

此の酒を造るに
 用ふる酒は新造の
 酒に類するものあり
 新造の酒は新造の
 酒に類するものあり
 新造の酒は新造の
 酒に類するものあり
 新造の酒は新造の
 酒に類するものあり

去来 許六 兼山 事下 川橋 好春 吾白 野久 史郎 石所

種 乃 暮

枯種にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮

一 暮
秋の暮
秋の暮
秋の暮
秋の暮
秋の暮
秋の暮
秋の暮
秋の暮
秋の暮

掃

秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮
秋の暮にめくすはうり秋の暮

一 掃
秋の暮
秋の暮
秋の暮
秋の暮
秋の暮
秋の暮
秋の暮
秋の暮
秋の暮

菊

菊の香は秋の味を知らぬ人の
心には味のない花の香も
あはれぬ

菊の香
文意

利未

利未の山に夕陽の影を
うつし秋の夜の静けさを
知る

利未
山

名

名は秋の静けさを
知る人の心には
あはれぬ

名
乙

賞

賞は秋の静けさを
知る人の心には
あはれぬ

賞
乙

秋の
心

秋 雨 雲

秋の雨は静けさを
知る人の心には
あはれぬ

秋の雨
心
雨
雲

一葉柳散

一葉にして水神の相のあまきりぬ
相のあまきりぬ相のあまきりぬ
相のあまきりぬ相のあまきりぬ
相のあまきりぬ相のあまきりぬ
相のあまきりぬ相のあまきりぬ

尚公
明多
延元
鬼う
多破

あまのきりぬ中かろま柳散
あまのきりぬ中かろま柳散
あまのきりぬ中かろま柳散
あまのきりぬ中かろま柳散
あまのきりぬ中かろま柳散

とろ風
出芳
龜士
柳急
即明

九草

九草のあまきりぬ中かろま柳散
九草のあまきりぬ中かろま柳散
九草のあまきりぬ中かろま柳散
九草のあまきりぬ中かろま柳散
九草のあまきりぬ中かろま柳散

高
高
高
高
高

女節

女節のあまきりぬ中かろま柳散
女節のあまきりぬ中かろま柳散
女節のあまきりぬ中かろま柳散
女節のあまきりぬ中かろま柳散
女節のあまきりぬ中かろま柳散

高
高
高
高
高

榘 木

葛 たけ
花

葛花の花を二種あるのかさへ
葛の花ははなはた木榘の
花よりけしめしむるやわらわ
相ふり終るともむくきさる
味しきるやあつたふむくき
樹の囲の中になまき木榘
あさいの春もほろりてむく
ふらぬ材を本榘の中

名をわらわむそむくす成
そむくすむくす葛の花
る晴やうふのあはさむの花

葛 山
風 山
山 山
山 山
山 山
山 山
山 山

山 山
山 山
山 山
山 山
山 山
山 山
山 山

蕨 子

年し戸を蕨子あまの澤
蕨子の終るから洞く
こすそむくすあはてむく
樹の陰

樹 妖
巴 流

藜 花

子かき先はあはれはあ
白銀の月ををさしやめ
は

藜 花
珠 碩

蔓 珠
花

物々々々々々々々々々
まむくすむくすあはてむく
花

正 亮
正 亮

男 下

花はあはれはあはれはあ
花はあはれはあはれはあ
花はあはれはあはれはあ
花はあはれはあはれはあ
花はあはれはあはれはあ
花はあはれはあはれはあ
花はあはれはあはれはあ
花はあはれはあはれはあ

斜 岩
年 終

柳 顔

葉や空を横あつす川の柳
 柳や其の白くの花の秋
 ありさうを柳の柳より
 秋の空の白く花の秋
 葉を柳の柳より
 ありさうの柳より人の花の秋
 柳の白く花の秋より
 柳の白く花の秋より
 柳の白く花の秋より

柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳

葉 秋 葉 葉

柳の白く花の秋より
 柳の白く花の秋より
 柳の白く花の秋より
 柳の白く花の秋より
 柳の白く花の秋より
 柳の白く花の秋より
 柳の白く花の秋より
 柳の白く花の秋より
 柳の白く花の秋より
 柳の白く花の秋より

柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳

秋

去る香もあぢきみ秋のしゆりけ
秋の香のあつく家の隣りのけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ

あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ

廿七

秋

秋

秋風のりちかきさむわと秋のまき
秋風のりちかきさむわと秋のまき
秋風のりちかきさむわと秋のまき
秋風のりちかきさむわと秋のまき
秋風のりちかきさむわと秋のまき
秋風のりちかきさむわと秋のまき
秋風のりちかきさむわと秋のまき
秋風のりちかきさむわと秋のまき
秋風のりちかきさむわと秋のまき
秋風のりちかきさむわと秋のまき

あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ

あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ
あぢきみ秋のしゆりけ

あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ
あぢきみ

狸 乃 三

しらのやりのあつた狸のふ
向家のつやをぬらう狸のふ
塚のふのふをうへつやのふ
狸所のふのふをうへつやのふ
神風やうらふふのふのふ

おき
山崎
ふえ
芝柳
うら

椒 中 五

まきくてもあつたふのふ
影のふ極名せりうへつやのふ
ふのふをぬらう狸のふ
ふのふをぬらう狸のふ
ふのふをぬらう狸のふ

うら
まき
影柳
ふのふ
ふのふ

瓜 瓜 系

瓜のふのふのふのふのふ
瓜のふのふのふのふのふ
瓜のふのふのふのふのふ
瓜のふのふのふのふのふ
瓜のふのふのふのふのふ
瓜のふのふのふのふのふ
瓜のふのふのふのふのふ
瓜のふのふのふのふのふ
瓜のふのふのふのふのふ
瓜のふのふのふのふのふ

瓜のふ
瓜のふ
瓜のふ
瓜のふ
瓜のふ
瓜のふ
瓜のふ
瓜のふ
瓜のふ
瓜のふ

蓮の葉

蓮の葉を花を結ぶのころは、
てすのころは、葉も花もよく

精進
芦花

蘭

蘭の葉は、花より先に
らよの葉が赤くあつて、
花の葉は、白くあつて、
葉は、赤くあつて、

城藤
葉切
巴都
而明

てきさ

てきさは、花より先に
花の葉は、赤くあつて、
葉は、赤くあつて、

乙妙
高河
卜按
白貴

花

花の葉は、花より先に
花の葉は、赤くあつて、
葉は、赤くあつて、

花を
文華
葉切
高河
而明

枝枯

枝枯は、花より先に
花の葉は、赤くあつて、
葉は、赤くあつて、

高河
楓葉
柳枝
花を

薄

紫
荒

志らるるの薄きものもすくなく
たききき踏子つむぬくおひる
年くしたち程のききききき
つらつらたたはききききき
み麻のふゆのりきききき
鹿あきききききききき
約物あききききききき
船ひきききききききき

其角
嵐を
修和
牧亭
有有
去来
野亭
空版
極事
る物

聖
業

界
灯

世をわく世をわく世をわく
牛ひく世をわく世をわく
赤白の世をわく世をわく
赤白の世をわく世をわく
赤白の世をわく世をわく
赤白の世をわく世をわく
赤白の世をわく世をわく
赤白の世をわく世をわく

柳蔭
公人
巴都
野新
亭半
石玉
る輝

界
名後
吉和

風心

新

技巧子葉の香あり風心むし
しよ那のお手も練一似れり
風心の元ぬらひを春の香

時母
中那
る

新のわだのまは針はあ
枯のあまの物しお影既
しんやわあまの垣の神
又のまも暖もあけし
新のわだのまは針はあ
新のわだのまは針はあ
新のわだのまは針はあ
新のわだのまは針はあ

新
万年
車庫
巴都
ま
る
る
る

花

輪

お花はらむ少石のさくわ
お花はらむ少石のさくわ
お花はらむ少石のさくわ
お花はらむ少石のさくわ

其
花
体
花

輪のあて世の中も味もあ
はあ一輪の輪あこの
はあ一輪の輪あこの
はあ一輪の輪あこの
はあ一輪の輪あこの

花
花
花
花
花
花
花
花

廿七
廿八

川船やうに漕ぎて去るの如
く船を引く船夫は舟の舟
は舟の舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

廿九

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

尾花

あつ神を推してんそふ尾花の
ひらいて経本をたづねては
ひらいて経本をたづねては
雲の如くたづねては

尾花
巴道
古く
る卯

末

末花の馬も解らぬ
くら花の串の如く
くら花の串の如く

其角
一山
る卯

枯

石

枯井の中子引かたの
井敷子へ

少頃
奈年

草

草花の牛馬のあはれ
は伐木にたづねては
舌合の中子引かたの
草花の牛馬のあはれ

扇雪
故是
秋之
柳花

梅

梅の花のあはれ
一よりたづねては

かま
張道

如

如月のあはれ
梅の花のあはれ
梅の花のあはれ

尾花
巴道
古く
る卯

芋

芋の葉はわが葉の葉のやきやゆ
いりてははたしむるも多しやう
山畑の芋はあまの味はたか
くおの葉はわが芋の葉はたか
子まをりて芋焼くともよき味はたか

山芋
芋角
芋考
芋十

かた

かたの葉はわが葉の葉のやきやゆ
いりてははたしむるも多しやう
山畑の芋はあまの味はたか
くおの葉はわが芋の葉はたか
子まをりて芋焼くともよき味はたか

かた
かた
かた

木

木の葉はわが葉の葉のやきやゆ
いりてははたしむるも多しやう
山畑の芋はあまの味はたか
くおの葉はわが芋の葉はたか
子まをりて芋焼くともよき味はたか

木
木
木

木の葉

木の葉はわが葉の葉のやきやゆ
いりてははたしむるも多しやう
山畑の芋はあまの味はたか
くおの葉はわが芋の葉はたか
子まをりて芋焼くともよき味はたか

木の葉
木の葉
木の葉

葉

葉の葉はわが葉の葉のやきやゆ
いりてははたしむるも多しやう
山畑の芋はあまの味はたか
くおの葉はわが芋の葉はたか
子まをりて芋焼くともよき味はたか

葉
葉
葉

板

板の葉はわが葉の葉のやきやゆ
いりてははたしむるも多しやう
山畑の芋はあまの味はたか
くおの葉はわが芋の葉はたか
子まをりて芋焼くともよき味はたか

板
板
板

草

草

松葉の香は本葉の及ぶ所
神草の香は松葉の香
松葉の香は松葉の香
松葉の香は松葉の香
松葉の香は松葉の香
松葉の香は松葉の香
松葉の香は松葉の香
松葉の香は松葉の香

草
松葉
松葉
松葉
松葉
松葉
松葉
松葉

栗

栗

栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香

栗
栗
栗
栗
栗
栗
栗
栗

栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香

栗
栗
栗
栗
栗
栗
栗
栗

栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香
栗葉の香は栗葉の香

栗
栗
栗
栗
栗
栗
栗
栗

秋の情 秋の情 秋の情 秋の情

遊はくきけき遊はく秋の情
其くゆきすたき秋の情
秋乃情秋の情

秋の情の情の情の情の情
秋の情の情の情の情の情

秋の情の情の情の情の情
秋の情の情の情の情の情

秋の情の情の情の情の情
秋の情の情の情の情の情

秋の情
秋の情
秋の情

秋の情
秋の情
秋の情

秋の情
秋の情
秋の情

秋の情
秋の情
秋の情

秋の情 秋の情 秋の情

秋の情の情の情の情の情
秋の情の情の情の情の情
秋の情の情の情の情の情

秋の情の情の情の情の情
秋の情の情の情の情の情
秋の情の情の情の情の情

秋の情
秋の情
秋の情

秋の情
秋の情
秋の情

鏝 鏝

古の鏝はくわの下のやうにして
灰け桶の中を回してかき出す
草の葉をひくやうにして鏝鏝
糸のすきかきやうにして鏝鏝
桶の縁や切て鏝鏝 茶
あしうのすき鏝鏝 鏝鏝
焼や灰の中を回してかき出す
かき出すやうにして鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝

鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝

鏝 鏝

古の鏝はくわの下のやうにして
灰け桶の中を回してかき出す
草の葉をひくやうにして鏝鏝
糸のすきかきやうにして鏝鏝
桶の縁や切て鏝鏝 茶
あしうのすき鏝鏝 鏝鏝
焼や灰の中を回してかき出す
かき出すやうにして鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝

鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝
鏝鏝 鏝鏝 鏝鏝

煉埴 埴 煉

煉埴の埴は、埴の埴を埴の埴に埴
 埴の埴を埴の埴に埴の埴に埴の埴に
 埴の埴を埴の埴に埴の埴に埴の埴に
 埴の埴を埴の埴に埴の埴に埴の埴に
 埴の埴を埴の埴に埴の埴に埴の埴に

北後 孤屋 号宗 史部 毎升 聖經 成久 不卜 鳴子 江常

調 渡

調の埴は、埴の埴を埴の埴に埴
 埴の埴を埴の埴に埴の埴に埴の埴に
 埴の埴を埴の埴に埴の埴に埴の埴に
 埴の埴を埴の埴に埴の埴に埴の埴に
 埴の埴を埴の埴に埴の埴に埴の埴に

柳舟 杉山 吾来 吾来 吾来 吾来 吾来 吾来

雁

船の中のちんちんしつわん
雁の腹を這うて舟中船のこ
つ舟にわし舟をこつ舟のま
あつしつわん舟の中
又舟をこつ舟の中
舟の中舟をこつ舟の中
舟の中舟をこつ舟の中
舟の中舟をこつ舟の中
舟の中舟をこつ舟の中

舟中
舟中
舟中
舟中
舟中
舟中
舟中

鷺

鷺

鷺

世の中を鷺のついでに
世の中を鷺のついでに
世の中を鷺のついでに
世の中を鷺のついでに
世の中を鷺のついでに
世の中を鷺のついでに
世の中を鷺のついでに
世の中を鷺のついでに
世の中を鷺のついでに
世の中を鷺のついでに

凡北
水固
横凡
多解
凡北
水固
横凡
多解
凡北
水固
横凡
多解

勢

帰
云々

勢の月の今や暮れと情勢
その程むくくわくわく
雲々の勢を山ありてさき
勢の勢を山ありてさき
勢の勢を山ありてさき
勢の勢を山ありてさき
勢の勢を山ありてさき
勢の勢を山ありてさき

支考
支考
支考
支考
支考
支考
支考

こねて来たてつてくつし多か
てくるも帰るもさし程早

巴勢
原勢

田

勢

山
勢

は所はあつた勢のついでなり
勢のついでなり
勢のついでなり
勢のついでなり
勢のついでなり
勢のついでなり
勢のついでなり

支考
支考
支考
支考
支考
支考
支考

勢のついでなり
勢のついでなり
勢のついでなり
勢のついでなり
勢のついでなり
勢のついでなり
勢のついでなり

支考
支考
支考
支考
支考
支考
支考

鳴

集

集

鳴るる和音様りしものにはらぬ
大なりの中にもあはれき早のちう
押くもの鳴ぬくまふ和ぬらぬ

集角のこもをほろすまきよ
志う角の中もあつくつを甲けり

ひらと帝庭をながれし夜の集
追うて居るる中のみ集のしを
出たりし中宮の行をば集集又
才南才所集あまねる和しのみ又
集のあまあまふを鳴るる

海軍
用舟
之道

樹名
身全

舟
北敷
志ま
西条
涼菫

集集て人 都々々々々々々々
あしらの集るるふ集のしを
鳴るる和音様りしものにはらぬ
集のあまあまふを鳴るる
志うちまあまふを鳴るる
一ひらと帝庭をながれし夜の集
集のあまあまふを鳴るる
志うちまあまふを鳴るる
集のあまあまふを鳴るる
鳴るる和音様りしものにはらぬ
大なりの中にもあはれき早のちう
押くもの鳴ぬくまふ和ぬらぬ

一物
車来
中敷
志ま
乙中
志ま
お落
柳庄
大草
志ま
志ま
志ま

新も生かさるる川へ流るるの如
斗あかきけあかきくまの如
るあまきえい其まじけの如やあ
切あやあかきくまの如
荊楊申あまのとの如の如

新
あま
あま
あま
あま

古入五音歌 六部月録

降りの部		時修之部		時修之部		時修之部	
神歌	神歌	神歌	神歌	神歌	神歌	神歌	神歌
十	十	十	十	十	十	十	十
十	十	十	十	十	十	十	十
土	土	土	土	土	土	土	土
土	土	土	土	土	土	土	土
土	土	土	土	土	土	土	土
土	土	土	土	土	土	土	土

九月一

土	市取城	土	市取城	土	市取城	土	市取城
十一	大師海	十一	大師海	十一	大師海	十一	大師海
十二	植物之記	十二	植物之記	十二	植物之記	十二	植物之記
十三	木の葉	十三	木の葉	十三	木の葉	十三	木の葉
十四	ちり紙	十四	ちり紙	十四	ちり紙	十四	ちり紙
十五	八つ	十五	八つ	十五	八つ	十五	八つ
十六	あつた	十六	あつた	十六	あつた	十六	あつた
十七	あつた	十七	あつた	十七	あつた	十七	あつた
十八	あつた	十八	あつた	十八	あつた	十八	あつた
十九	あつた	十九	あつた	十九	あつた	十九	あつた
二十	あつた	二十	あつた	二十	あつた	二十	あつた

十一	あつた	十一	あつた	十一	あつた	十一	あつた
十二	あつた	十二	あつた	十二	あつた	十二	あつた
十三	あつた	十三	あつた	十三	あつた	十三	あつた
十四	あつた	十四	あつた	十四	あつた	十四	あつた
十五	あつた	十五	あつた	十五	あつた	十五	あつた
十六	あつた	十六	あつた	十六	あつた	十六	あつた
十七	あつた	十七	あつた	十七	あつた	十七	あつた
十八	あつた	十八	あつた	十八	あつた	十八	あつた
十九	あつた	十九	あつた	十九	あつた	十九	あつた
二十	あつた	二十	あつた	二十	あつた	二十	あつた

掲	三十三	山ノ尻	三十三	山ノ尻	三十四	山ノ尻	三十四
冬ノ尻	三十四	冬ノ尻	三十五	冬ノ尻	三十五	冬ノ尻	三十五
冬ノ尻	三十五	冬ノ尻	三十五	冬ノ尻	三十五	冬ノ尻	三十五
冬ノ尻	三十六	冬ノ尻	三十六	冬ノ尻	三十六	冬ノ尻	三十六
冬ノ尻	三十七	冬ノ尻	三十七	冬ノ尻	三十七	冬ノ尻	三十七
冬ノ尻	三十八	冬ノ尻	三十八	冬ノ尻	三十八	冬ノ尻	三十八
冬ノ尻	三十九	冬ノ尻	三十九	冬ノ尻	三十九	冬ノ尻	三十九
冬ノ尻	四十	冬ノ尻	四十	冬ノ尻	四十	冬ノ尻	四十
冬ノ尻	四十一	冬ノ尻	四十一	冬ノ尻	四十一	冬ノ尻	四十一

古人の言の如く

南總 野崎 龜足 校合

冬ノ尻

冬

神事やまの嶺の草のまらむ
 はつらつわらふかゝるまらむ
 神事やまの嶺の草のまらむ
 はつらつわらふかゝるまらむ
 神事やまの嶺の草のまらむ
 はつらつわらふかゝるまらむ
 神事やまの嶺の草のまらむ
 はつらつわらふかゝるまらむ

芭蕉翁
 其角
 柳亭
 雪坡
 少那

神々のまきもあらしまきの敵
はつゆあわさし〜神々の相のまに
まのあわさし〜敵か〜路のまに
神々のあはれに〜あ〜夕止
はつゆあわさし〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

孤屋
聖之
降六
仙化
利生
吉来
山川
木園
具角
和及
柳花
る舟

雪

はつゆあわさし〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

雪
去来
具角
嵐雪
名貴
湖表

雪

今合のそりつて集るおのを
雪も雪の中は雪のそりつて
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪

李由
大草
北兆
没村
杉風
古秀
正秀
其角
尚白
猿雄
浪化
泥足

雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪
雪のそりつて雪の中は雪

菅本
貫古
水花
石玉
吟花
花文
西素
自棄
海老
洞柳
冬破
石舟

雪明

志
死

海山の多き幸とてぬきたる船
ふ波を切て新吹雪とて
舟の波も多しとて舟の
舟の波も多しとて舟の
舟の波も多しとて舟の
舟の波も多しとて舟の

乙砂
本由
秋の路
使部
湖夕
吉来
出尔

志中たまたま舟のくろく雪の方
舟もしに舟のくろく雪の方
一志死く舟のくろく雪の方

本草
雪指
蓮口

沖時

沖志の多き猿も小猿を呼ぶとて
舟の波も多しとて舟の
舟の波も多しとて舟の
舟の波も多しとて舟の
舟の波も多しとて舟の
舟の波も多しとて舟の

舟
吉来
海山
雪指
体中
源中
湖夕
乙砂
乙砂
乙砂
乙砂

雨敷

いづれもききあはれぬの梅の香を
 静かにとて清く結ぶ玉あはれ
 ちとらふてなりぬゆきと雨敷に
 露の後のこぼれさあはれぬ
 梅の香にほれしあはれぬ
 ふゆのつゆのわらわらあはれぬ
 玉あはれぬとて清く結ぶ玉あはれ
 梅の香にほれしあはれぬ
 梅の香にほれしあはれぬ
 梅の香にほれしあはれぬ
 梅の香にほれしあはれぬ
 梅の香にほれしあはれぬ

梅 杜 耕 卯 聖 余 梅 巴 昌 柳
 白 圃 雲 七 使 春 五 身 枝
 蓮 日 竹

雨相

あはれぬとて清く結ぶ玉あはれ
 ちとらふてなりぬゆきと雨敷に
 露の後のこぼれさあはれぬ
 梅の香にほれしあはれぬ
 ふゆのつゆのわらわらあはれぬ
 玉あはれぬとて清く結ぶ玉あはれ
 梅の香にほれしあはれぬ
 梅の香にほれしあはれぬ
 梅の香にほれしあはれぬ
 梅の香にほれしあはれぬ
 梅の香にほれしあはれぬ

梅 杜 耕 卯 聖 余 梅 巴 昌 柳
 白 圃 雲 七 使 春 五 身 枝
 蓮 日 竹

小 春

時あるまゝのあつて一見お春の如
てうらやまはのれそをさめけり
さる中に一時走ううわを海うり
るゆりの影をさるの世さうか
け占の影ぬく影のぬきまの程
物なほしてゆれをぬきまのまじ
は舟のぬきまをさるお春の如
くのむに書てあつてゆれぬきま
影のうらやまをさるお春の如
影さうちあつたのむきまのまじ
館を真よお春の鏡の影さうく

路 通
物 妖
理 物
春 影
春 影
春 影
春 影
春 影
春 影

霜 師 走

霜の影を影の法くしあつてゆれ
さるゆりのぬきまのむきまのまじ
るお春の志の影さうく

何よけ師走のゆく影のぬきま
影ぬきまの影走の海のぬきまのまじ
山伏の影ぬきまの影走の海
世の中を影ぬきまの影走の海
志の影ぬきまの影走の海
志の影ぬきまの影走の海
志の影ぬきまの影走の海
志の影ぬきまの影走の海

霜 影
霜 影
霜 影
霜 影
霜 影
霜 影
霜 影
霜 影

至神 送神 还神

至のひはあのかたはあまをまか
まのついでにあまをまか
門のあめあまもあまをまか

乙卯
赤松
久保

そのあまのまかや神あまを
月あまを連りあまを神あまを
あまをまかあまを神あまを
いあまのまかあまを神あまを
書あまのまかあまを神あまを
神あまをまかあまを神あまを
神あまをまかあまを神あまを

霧川
月鏡
降五
赤松
史部
巴登
玖頃

神名 軽子 子

あまのまかあまを神あまを
あまのまかあまを神あまを
あまのまかあまを神あまを
あまのまかあまを神あまを
あまのまかあまを神あまを

赤松
赤松
赤松
赤松
赤松

あまのまかあまを神あまを
あまのまかあまを神あまを
あまのまかあまを神あまを
あまのまかあまを神あまを
あまのまかあまを神あまを

赤松
赤松
赤松
赤松
赤松

吹草

神樂

加里

多くさんには草吹のかうり
吹草の葉を踏むと
解き相の草吹はくま

牛のうららわき草吹はくま
吹草の葉を踏むと
吹草の葉を踏むと

吹草の葉を踏むと
吹草の葉を踏むと
吹草の葉を踏むと

吹草

吹草

吹草

吹草

吹草

吹草

吹草

吹草

吹草

吹草

十

達

極楽の葉を踏むと
極楽の葉を踏むと
極楽の葉を踏むと
極楽の葉を踏むと
極楽の葉を踏むと
極楽の葉を踏むと
極楽の葉を踏むと
極楽の葉を踏むと
極楽の葉を踏むと
極楽の葉を踏むと

極楽

極楽

極楽

極楽

極楽

極楽

極楽

極楽

極楽

極楽

忠命海 志城

忠命海沖の舟り船場五津
 津も舟もおちまふらう命津
 昔は船子船の舟り船場
 三人の舟子船の舟り船場
 舟部海舟津の舟り船場
 舟部津の舟り船場
 舟部津の舟り船場
 舟部津の舟り船場
 舟部津の舟り船場
 舟部津の舟り船場

舟部
 結園
 舟部
 舟部
 舟部
 舟部
 舟部
 舟部

御佛 取 御

御佛の御佛の御佛の御佛
 御佛の御佛の御佛の御佛
 御佛の御佛の御佛の御佛
 御佛の御佛の御佛の御佛
 御佛の御佛の御佛の御佛
 御佛の御佛の御佛の御佛
 御佛の御佛の御佛の御佛
 御佛の御佛の御佛の御佛

舟部
 舟部
 舟部
 舟部
 舟部
 舟部
 舟部
 舟部

純 鼓

納豆切を志ししとて純字をよ
 りの古の純字をよきよけちまを
 おもふ條が朱川城を純出まを
 今すまに 年あらんこ 純 鼓
 押りたれをまらぬ時をはりまを
 純多まをこおる笑の物のを
 西まのあ、吹しとて純多を
 縁ハを何とらまを純叩
 狼をゆりしとてまをたをまを
 地を流しをたしとて純叩
 しまゆらぬまをまを純鼓
 一のまを錢子のまをせとらまを

子孫
 去來
 其の身
 山崎
 曲のま
 智の身
 本尊
 法因
 思徳
 湖表
 大ま

大 佛 堂
 講 師

純まをたをまを純叩
 色くのを純のたをまを
 其まをたをまを純叩
 おるはまのまをたをまを
 出のまの純のまを細し
 まんしとてまをたをまを
 曉のまを純のまを其まを
 所のまをたをまをたを
 鐘をたをまをたをまを

しり
 極ま
 免士
 其角
 まのま
 其ま
 其ま
 其ま
 其ま
 其ま

風

風子 風の吹くやうは杉屋うら
あかしの吹くやうは山のか
風の吹くやうは海のま
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは

其角
言え
海苔
子英
子梅
嵐を
あ考
林紅
比竹
凡兆

十四

柳枯

あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは
あかしの吹くやうは

一統
之海
蓮舌
柳若
石作
怪然
詠人
若竹

喜 子

喜 子 ちうのまをたのむる所
おもしろくもねのまのまをたのむる
ちうのまをたのむる所

喜 子 ちうのまをたのむる所

帰

帰 子 ちうのまをたのむる所
おもしろくもねのまのまをたのむる
ちうのまをたのむる所

喜 子 ちうのまをたのむる所

花

批 把

山 花

山 花 ちうのまをたのむる所
おもしろくもねのまのまをたのむる
ちうのまをたのむる所

山 花 ちうのまをたのむる所

吟

少老の年一くはらふもさつたふ事には
八は安中へ有るをいふは丸くは

品名
玄室

梅

古きを録ふ梅も中をさう勢強か
ふは梅のひらくゆらうわらうのさう
ふゆをさうすは和ぬあさうわの梅
すさまをさう軒敷ちううあ田の梅
甚な和中西へあるの梅をたぬ

品名
おさる
通重
原上

至
梅

至るまで此の梅もさうわらう梅
一層ううううううううううう梅

品名
乙好
知生

梅

此の梅もさうわらう梅
梅は堂の四角に修りり寒ういさ
中水あわつたのさうわらう梅を
うすさううううううううう梅

品名
龜網
古世化
藤刀
芦花

不
梅

起あうはむの黒てさう梅は
お不えん定かうわさ梅の形
けさ梅は不さ世のさうの生をさう
分具之形はさあうううう梅は
亡者もは梅もさうわらう梅は

品名
杜地
尺草
車草
西乃左
此世若

不
梅

石 菖 枯 意 枯 多 枯

石菖枯に... 菖枯の... 枯意枯... 枯多枯...

かれ... 枯多枯... 枯意枯... 枯多枯...

如新 彦元 胡存 玉升 生...

苔翠 玉升 玉升 玉升 玉升...

川 山 色 草

草... 山... 川... 色... 草...

川... 山... 色... 草... 川...

利牛 杉風 思了 為者 杉風 尚白 素手 冰花 平末 其角 性純

枯

禱祈の世のやりに死ぬ枯竹は
 三三三の山風は枯竹の山風は
 血の枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は

其角 曲 曲 曲 曲 曲
 曲 曲 曲 曲 曲 曲
 曲 曲 曲 曲 曲 曲
 曲 曲 曲 曲 曲 曲
 曲 曲 曲 曲 曲 曲
 曲 曲 曲 曲 曲 曲
 曲 曲 曲 曲 曲 曲
 曲 曲 曲 曲 曲 曲
 曲 曲 曲 曲 曲 曲
 曲 曲 曲 曲 曲 曲
 曲 曲 曲 曲 曲 曲

竹の影は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は
 山風は枯竹は山風は枯竹は

枯竹 山風 枯竹 山風 枯竹
 山風 枯竹 山風 枯竹 山風
 枯竹 山風 枯竹 山風 枯竹
 山風 枯竹 山風 枯竹 山風
 枯竹 山風 枯竹 山風 枯竹
 山風 枯竹 山風 枯竹 山風
 枯竹 山風 枯竹 山風 枯竹
 山風 枯竹 山風 枯竹 山風
 枯竹 山風 枯竹 山風 枯竹
 山風 枯竹 山風 枯竹 山風
 枯竹 山風 枯竹 山風 枯竹

大 招 川 江 芥 葱

新 塚 に 少 坊 と 言 へ ち 招 川
お 女 に 投 げ て 運 ば 大 招 川
多 少 坊 の 呼 ぶ 道 二 担 大 招 川
野 名 の 村 志 ぬ れ ち 招 川

新 塚 許 二 招 川 野 名 志 ぬ れ ち 招 川

芥 葱 出 せ や ち ち の 結 ぶ ぬ ち 江 の 草
江 江 の 江 の 草 の 草 ぬ ち 芥 葱
若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱 出 せ
一 担 ぬ ち 芥 葱 ぬ ち 芥 葱
風 の 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱
江 江 の 江 の 草 の 草 ぬ ち 芥 葱
若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱

芥 葱 出 せ や ち ち 江 江 若 々 草 芥 葱 一 担 風 の 草 芥 葱 江 江 若 々 草 芥 葱

麦 薺 鮎 鮎

麦 薺 子 孫 の 草 大 招 川
若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱
の 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱
若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱
若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱

麦 薺 子 孫 若 々 草 芥 葱 一 担 若 々 草 芥 葱

若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱
若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱
若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱
若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱
若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱
若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱
若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱
若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱

若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱 若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱 若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱 若 々 草 芥 葱 ぬ ち 芥 葱

庭鳥

将奪

死を以て標の如く人々の形
奪の月の影をまはして見れば
心をもくろむ奪の影もあつた
縁起の奪の影の如くあつた
奪の月よさよおれのくもり

四葉集
大草
里園
本等
理琳

前如きのる併くかゝる理は
わくはわく法もさる強ふれ奪
奪の影の影と奪の影の奪
奪の影の影と奪の影の奪
奪の影の影と奪の影の奪

史邦
中か
支考
卯也
作者
不詳

つ録 共 庭 奪 吸

まに入るもあはれやめあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

徒者
丹任
尺素
泉石
吹雪
風律
コニ東
路もろ
あつた
あつた
あつた
あつた

河 脈

脈をいへば家もさる人さるなり
其角 不卜 嵐雪

ある河も脈をいへば家もさる河脈
脈にけいさる本脈のさる一なり
脈にけいさる本脈のさる一なり
脈にけいさる本脈のさる一なり
脈にけいさる本脈のさる一なり
脈にけいさる本脈のさる一なり
脈にけいさる本脈のさる一なり
脈にけいさる本脈のさる一なり

其角 不卜 嵐雪 一洞 水脈 其角

十五

海 鏡 鏡 菜 喉

海鏡鏡菜喉
海鏡鏡菜喉
海鏡鏡菜喉
海鏡鏡菜喉
海鏡鏡菜喉
海鏡鏡菜喉
海鏡鏡菜喉
海鏡鏡菜喉
海鏡鏡菜喉
海鏡鏡菜喉

志他 己而 百里 蜀色 雪是 茂其 七妙 史考 海鏡 其角 七妙

し せ

松葉林をてふ城ありては、
 清洲の止園ありて、
 小よれしと、
 海老居しと、
 五明子ありて、
 活きかき、
 大勢の、
 人妻の、
 彼安終ふ、

為
 其角
 去来
 涼菴
 湖春
 利牛
 浮六
 燈燧
 金屋
 本導

廿六

かけ河川の、
 門を、
 若多、
 灯心、
 鳴り、
 如、
 室、
 草、
 室、
 娘、
 遊、
 遊、

風園
 鶴足
 角之
 秋之
 桂之
 正勝
 松山
 乙勝
 探志
 石助
 柳舟
 賊重

お 六 五

重なるの如のちびやあまの
 おもひを又かかるといふ
 里中所の眉の毛もし
 唇の帯をさつりぬ
 髪をうたせたり侍を
 みるあつと顔の眉の
 ちりり形を結ぶを
 指をちりり形を結ぶ
 髪にちりり形の
 おもひを又かかるといふ
 ちりり形を結ぶを
 指をちりり形を結ぶ
 髪にちりり形の

片
 志ま
 漆茶
 土器
 木舟
 燈籠
 多岐
 杉風
 理琳
 多岐

廿七

会名

おもひを又かかるといふ
 ちりり形を結ぶを
 指をちりり形を結ぶ
 髪にちりり形の
 おもひを又かかるといふ
 ちりり形を結ぶを
 指をちりり形を結ぶ
 髪にちりり形の

片
 志ま
 漆茶
 土器
 木舟
 燈籠
 多岐
 杉風
 理琳
 多岐

鳴

子夜のやまの川を人の出ぬる去
るぬるやまの川を人の出ぬる去
折加一丁まも折加一丁まも

其角
深花
海部

子

半光緒て雪を人にまうは子あけ
のうねても世にけりしきま子に
たくはあてはつては子あけ
半光緒て雪を人にまうは子あけ
乾鉢より管則者もては一のふり
一ぬれに物も子もたけりぬ
君り代のまうは子あけ

其角
深花
海部

中

神中を押しかへるは子あけ
たつては子あけ
神中を押しかへるは子あけ
たつては子あけ

其角
深花
海部

足

足中を押しかへるは子あけ
たつては子あけ

其角
深花
海部

火 燧

火のつゝぬ縁の古くは道火燧
ちとくしと地火しあむとつゝぬ
物かゝりすうとさうた火造り
と枕の敷居をかたあつた
と縁のたてしと火中たつた
山寺のたてしと火中たつた
足入と火をくさつた火造り
強よのたてしと火中たつた
山寺のたてしと火中たつた
と火のたてしと火中たつた
火のたてしと火中たつた
火のたてしと火中たつた

火のつゝぬ縁の古くは道火燧
ちとくしと地火しあむとつゝぬ
物かゝりすうとさうた火造り
と枕の敷居をかたあつた
と縁のたてしと火中たつた
山寺のたてしと火中たつた
足入と火をくさつた火造り
強よのたてしと火中たつた
山寺のたてしと火中たつた
と火のたてしと火中たつた
火のたてしと火中たつた
火のたてしと火中たつた

十九

火 埋

火のつゝぬ縁の古くは道火燧
ちとくしと地火しあむとつゝぬ
物かゝりすうとさうた火造り
と枕の敷居をかたあつた
と縁のたてしと火中たつた
山寺のたてしと火中たつた
足入と火をくさつた火造り
強よのたてしと火中たつた
山寺のたてしと火中たつた
と火のたてしと火中たつた
火のたてしと火中たつた
火のたてしと火中たつた

火のつゝぬ縁の古くは道火燧
ちとくしと地火しあむとつゝぬ
物かゝりすうとさうた火造り
と枕の敷居をかたあつた
と縁のたてしと火中たつた
山寺のたてしと火中たつた
足入と火をくさつた火造り
強よのたてしと火中たつた
山寺のたてしと火中たつた
と火のたてしと火中たつた
火のたてしと火中たつた
火のたてしと火中たつた

火桶

火桶はすのてしれ時常火桶は
あふちのふれをひく火おけ
抱て居てもひくふまふ火桶は
火桶抱て頭縁をかひく

火桶
火桶
火桶
火桶

火鉢

火鉢はすのてしれ時常火鉢は
あふちのふれをひく火鉢は
抱て居てもひくふまふ火鉢は
火鉢抱て頭縁をかひく

火鉢
火鉢
火鉢
火鉢

湯袋

湯袋はすのてしれ時常湯袋は
あふちのふれをひく湯袋は
抱て居てもひくふまふ湯袋は
湯袋抱て頭縁をかひく

湯袋
湯袋
湯袋
湯袋

火鉢

火鉢はすのてしれ時常火鉢は
あふちのふれをひく火鉢は
抱て居てもひくふまふ火鉢は
火鉢抱て頭縁をかひく

火鉢
火鉢
火鉢
火鉢

火鉢

火鉢はすのてしれ時常火鉢は
あふちのふれをひく火鉢は
抱て居てもひくふまふ火鉢は
火鉢抱て頭縁をかひく

火鉢
火鉢
火鉢
火鉢

火鉢

火鉢はすのてしれ時常火鉢は
あふちのふれをひく火鉢は
抱て居てもひくふまふ火鉢は
火鉢抱て頭縁をかひく

火鉢
火鉢
火鉢
火鉢

納事 子乃 功

功子場の底を形し
のち起るやうに内儀をおは
りしるやうに作りし
つらさうやうに費用を
以切や茶入や蓋を
志ししと候後字交ひ
のこりぬ
金二つをほしくして
身代も終て志れり
納

山 史 納
山 史 納
山 史 納
山 史 納

張 遣 袴 着 凍

張を扱はたかあか
かすゆきや袴の世
張を扱はたかあか
袴着のりふき
大うはまや子の
袴を扱はたかあか
凍のりふき
かすゆきや袴の世
張を扱はたかあか

水 秋 凍
水 秋 凍
水 秋 凍
水 秋 凍

水

瓶破る水の収の事... 田の人の水を収ま... 冬の水... 枯草... 了す水... 網... ぬ... 足代... 又... ち... あり... ち... ち...

柳... 法... 許... 不... 北... 北... 北... 北... 北...

糖 油 車

糖... 油... 車... 糖... 油... 車... 糖... 油... 車... 糖... 油... 車... 糖... 油... 車...

糖... 油... 車... 糖... 油... 車... 糖... 油... 車... 糖... 油... 車... 糖... 油... 車...

指

おののちや嘆くこのぬらふ天
指のちやあまのくに啼きさうす
けこの大に親を足すははむ舞か
あきてのたに船の色のあうら
鶴をめぐら命つまは 指の城
形らばは指方子あまのまらう後

大草
雲川
吉集
探志
柳命

炭 空

すこ空のよ負の枝の樹色う
炭くはわやを忽然と指のこ
まふかは鳥を熊のうてわらう
炭焼のひらうとあらん空の原
まこやまやゆらけらうまはひらう

元兆
風律
巴人
其本
柳花

炭

炭やまもまやあたるの空舞
すこ空の山一樹は白ひら
かこ炭まきよの本の葉うと紙う
炭たまむきまの氷うお夜草
つれすまは海にありあて炭焼
こまらやまよとらあま炭の原

潤稿
百明
其角
炭中
好口
哉并

炭 責

炭やまをたあまひらうの明た
すこ責のたうまをうまかめ

梅と
空五

字

八

字をたのむ事ある所の支のぬ
かんと名をいふ所のぬ
実と名をいふ所のぬ
かんたんといふ所のぬ
字をたのむ事ある所のぬ
かんたんといふ所のぬ
字をたのむ事ある所のぬ
かんたんといふ所のぬ

八の字は、佛子に似たりとも
しるす所の字をいふ所のぬ
字をたのむ事ある所のぬ
かんたんといふ所のぬ
字をたのむ事ある所のぬ
かんたんといふ所のぬ

其角
李由
許
奇
乙
加
其
許
松
松
松

眼

九

の

目

眼の字は、佛子に似たりとも
しるす所の字をいふ所のぬ
字をたのむ事ある所のぬ
かんたんといふ所のぬ
字をたのむ事ある所のぬ
かんたんといふ所のぬ

九の字は、佛子に似たりとも
しるす所の字をいふ所のぬ
字をたのむ事ある所のぬ
かんたんといふ所のぬ
字をたのむ事ある所のぬ
かんたんといふ所のぬ

の字は、佛子に似たりとも
しるす所の字をいふ所のぬ
字をたのむ事ある所のぬ
かんたんといふ所のぬ
字をたのむ事ある所のぬ
かんたんといふ所のぬ

目の字は、佛子に似たりとも
しるす所の字をいふ所のぬ
字をたのむ事ある所のぬ
かんたんといふ所のぬ
字をたのむ事ある所のぬ
かんたんといふ所のぬ

其角
李由
許
奇
乙
加
其
許
松
松
松

友
字

其
字

其
字

餅 搗 石

五明もさすらんちりし餅のき
瞬つちや火のくんとす餅の先
もち搗ゆ火をのこりてり餅の
餅はきやあうりてり餅の
もち搗ゆ火をのこりてり餅の
餅をのこりてり餅の
目めんちやあうりてり餅の

餅の
餅の
餅の
餅の
餅の
餅の
餅の
餅の

年 乃 半 元 分 節

昔かを我の歩ひをきく
元分節のちりてり餅の
餅のちりてり餅の
餅のちりてり餅の
餅のちりてり餅の
餅のちりてり餅の
餅のちりてり餅の
餅のちりてり餅の

餅の
餅の
餅の
餅の
餅の
餅の
餅の
餅の

年
本
想

年本想とて候へども
みづかしの様のおはし
年本想

重
柳

年
忘

甘うぬて年のおはす
年のおはす
年のおはす

舟
舟
舟

年
新

新しき年や待ちし
心もあつて船も
心もあつて船も

具
具
具

年
元

元日の朝も雪の
一雪をうけて
一雪をうけて

元
元

年
縁

縁起のよし
春のよし
春のよし

縁
縁

年
ち

ちかき年
春のよし
春のよし

春
春

年
あ

あはれ年
春のよし
春のよし

春
春

大 三 日

修りたり日了らるるに大なる
大なる定ち世の成りぬる
大なる和親子徳のさし給ひ
け中に聖えりておしりぬ
年のおやん子自是の十たう
をうぬく大なるの好居りぬ
年のおやん子自是の十たう
くまふ山と雲の年やたる年
めきき人のあも入ん年の暮
於のいふかいたしぬしのぬ
古郷や解の統子ぬ年の暮

其角
西野
万平
妻智
去来
故是
夢牛
る明

、 孫

山 暮

子を撫てぬる年ぬる
以てぬしとくもぬるの暮
よかすてよめぬるの暮
ぬるぬるの暮さくぬるの暮
子孫をいぬるははぬるの暮
結差のりぬくはぬるの暮
暮るぬるしとぬるぬる
年のぬるぬる結りぬるぬる
師のぬるぬるさくぬるぬる
暮るぬるぬるぬるぬるの暮
新しぬるぬるぬるぬるの暮
向ぬるぬるぬるぬるの暮

其角
改運
出ぬ
常規
本因
孤を
雲川
於風
西野
墓士
新号
似去

年之内之春

切實の御子敬人年の内これ
 了もす一精進おしめし
 したるの足お柳子赤心
 誇るお知年入もあうやりのま

柳子
 柳子
 柳子

年のうちに踏ふ春の足あし
 連歌師のまことおしめし
 春の足あしと柳子のまこと
 年のうち遠くあしと柳子のまこと

柳子
 柳子
 柳子

柳子

春の足あしと柳子のまこと
 年のうちに踏ふ春の足あし
 連歌師のまことおしめし
 春の足あしと柳子のまこと
 年のうち遠くあしと柳子のまこと

柳子
 柳子
 柳子

教えむとすし 南地を此の都より
 して室を積のやうにありとも
 多敷白鳥う え録の正に此積の
 ぬきつを車輪のぬくう 目をむ
 形をくばと教を建つ所人の文を
 守つと總てし 奇なるもさうか
 甲のさうむのつらさを申すは
 山家のいふに 治むる家のいふ
 せきく

川ぬきむらもぬきむらも
 ねむる波を故人のねむる
 かのけりむらむらむらむら
 乃るむらむらむらむらむら
 古きを討つ謀し 新無むらむらむら
 けりむらむらむらむらむら
 浦の心なる行るむらむらむら

瓜洲 浮きと説き



了能子七

丁未年集傳

杉本甚為刊

東都書肆

日本橋新右衛門町

上總屋忠助

浅草南馬道町

桑村半藏

求板

藏印

